

# 公務災害防止事業の推進

## ▶ 安全管理セミナーを実施して ◀

### 1. はじめに

訓子府町は北海道北東部、オホーツク総合振興局管内に位置し、面積190.95平方キロメートル、人口5,200人の町です。町名の「訓子府」はアイヌ語からきており、「黒いところ、やち川にして水黒し」の意味があり、明治30年5月8日に高知県からの北光社移民団13戸45人が北に光を求めて、入植したことが開拓の第一歩でありました。

基幹産業である農業は、一戸当たりの平均経営面積は約18ヘクタールとオホーツク管内の平均規模を下回っていますが、限られた面積の中で生産性の高い集約的な経営が展開されています。玉ねぎ、畑作三品（馬鈴しょ・小麦・てん菜）、酪農といった経営形態を基本としつつ、水稲、豆類、スイートコーン、薬草、メロンをはじめ、栽培されている作物は多岐にわたります。

気候は冬期間の寒さは厳しく、氷点下20度を下回る時や暴風雪がありながらも、比較的穏や



訓子府町を横断する一級河川「常呂川」  
ところがわ

### 北見地区消防組合訓子府消防団

かで、年間平均降水量は500ミリ前後と少なく、日照時間にも恵まれている自然環境の豊かな町です。

### 2. 北見地区消防組合訓子府消防団の概要

北見地区消防組合訓子府消防団は、大正4年に私設訓子府消防組として組織され、同5年4月に公設消防組認可となり、防護団、警防団、消防団と変遷を重ね、昭和47年4月1日にオホーツク圏域の主要都市である北見市と周辺の置戸町、端野町、訓子府町の1市3町で北見地区消防組合が設立され、北見地区消防組合訓子府消防団（以下、訓子府消防団とする）と名称変更するに至りました。平成26年度、大正4年の消防組織発足から100周年を迎え、記念式典など各種行事を行ったところです。

現在の訓子府消防団の組織体制は1本部3分団、90名（うち女性団員12名）の団員で構成されています。消防団車両は水槽付消防ポンプ自動車3台、広報車等4台の合計7台が配備されています。



100年記念式典（団長式辞）

当消防団においては、毎月2回の定例訓練のほか、消防演習、町防災訓練への参加、各種防火に関する啓発・広報活動など地域に密着した活動を行っています。

### 3. 安全管理セミナー開催に至った経緯

最近10年間における、招集サイレンやEメールにより消防団員を招集する災害は、年間0～4件(平均1.7件)と比較的少ない件数で推移していますが、当消防団の団員平均年齢は42.5歳(平成27年4月1日現在)と年々高くなる傾向にあること、また、新規入団者を得ても経験が少ないことや緊張度の高まりによる事故の恐れがあること等から、少ない災害活動件数ではありますが公務災害事故を防止するという観点のもと、定例訓練時において年1回地元消防職員による安全管理講習、幹部消防団員による訓練指導、消防協会等主催の各種研修会に参加してきました。

今回、安全管理の認識をさらに深め、重要性を理解し実践する意識付けとして、消防基金より講師を派遣していただき、安全管理セミナーを開催する運びとなりました。

### 4. 研修の様子

定例訓練日である平成28年1月17日(日)午前8時15分、朝早い時間帯にも関わらずS-KYT指導員の佐々木講師にお越しいただき、訓子府消防庁舎講堂において、安全管理セミナーを開催し、団長以下45名(うち聴講の消防職員3名を含む)が参加しました。

団長挨拶、講師紹介に続いて始まったセミナーは、まず「訓子府消防団 ゼロ災でいこう ヨシ!」との佐々木講師の号令にあわせて、参加団員が一体感をもって唱和し、講習

開始となりました。

講師には、公務災害の発生状況、安全文化の醸成・心構え、東日本大震災での活動状況等、实例を踏まえたいへん理解しやすく講義をしていただきました。

当町におきましても近年の異常といわれる気象状況のためか、乾燥期に多量の牧草ロール火災が発生し活動が長時間に及んだことや、冬季において主要道路の通行止めを伴う暴風雪、歩行に恐怖を感じるほどのホワイトアウトが発生しており、幹部団員の中には災害活動を思い起こし、安全管理上の留意点を気にしながら受講している者もおりました。

講習終了後のアンケート記載では、安全管理の重要性再認識など記憶に残るセミナーであったことが伺え、その後の消防団活動での意識付けの一助となりました。



暴風雪後の町営住宅(平成27年3月)

### 5. 今後の取組

災害出動件数は少ないものの、平時の訓練においても事故防止の取組は必須であります。今回のように講師を招いての安全管理研修実施は、普段より緊張感をもって受講し、特に最新の情報や重要事項が記憶に残る効果が高いと考えられますので、機会をみて再度開催できれば

と思います。

また、通常時についても、幹部団員から部下団員へ安全管理についてS-KYTを用いた研修や、活動の元となる健康体力の維持についての研修等を計画したく考えています。

最後となりますが、当消防団のような小規模団体への講師派遣依頼を快諾くださいました消防団員等公務災害補償等共済基金の皆様に感謝申し上げます。



セミナー風景